

氏 名	嶺 山 敦 子
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（人間福祉）
学 位 記 番 号	甲人第17号（文部科学省への報告番号甲第496号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2013年12月4日
学 位 論 文 題 目	<b>久布白落実の研究</b> <b>－廃娼運動とその周辺－</b>
論文審査委員	（主査） 教 授 室 田 保 夫 （副査） 教 授 小 西 加保留 教 授 今 井 小の実

## 論 文 内 容 の 要 旨

嶺山氏の論文は、近代日本の廃娼運動を中心にして、女性福祉に関して重要な役割を果たした久布白落実という人物について、その生涯にわたる活動と思想につき論究したものである。久布白は牧師の家庭に生まれ、キリスト教に大きな影響を受けて成長していくが、叔母の矢島楯子が会頭である日本キリスト教婦人矯風会に入会し、廃娼運動を中心にして、婦人参政権運動、平和運動、あるいは性教育の課題、戦後の「混血児問題」、売春防止法の制定に向けての活動等々、女性の人権向上のための多くの社会的活動を展開していった。その生涯は彼女の自伝『廃娼ひとすじ』そのものであった。しかし彼女の活動や思想についてこれまで、キリスト教史、女性史、社会福祉史において十分な評価は為されてこなかった。それは何よりも彼女の研究が断片的なものに終始し、その全体像が見えてこなかったことによるものである。この論文で嶺山氏は、多くの史料を蒐集し、久布白の全体像にアプローチし、近代日本の中での彼女の布置を確立していくことを目的としている。以下、各章の内容について簡単にふれておきたい。

まず、「序章」では、「問題の所在」として、この研究への氏の動機とともに、研究する意義と目的、これまでの久布白の研究が何故に進捗しなかったかという理由が論じられている。そして先の久布白研究の意義や課題と連動して、研究史が詳細に辿られている。「研究の目的と視点」では、この研究史を踏まえて、博士論文の目的が述べられ、研究をしていく際の視点が提起される。つまり、「彼女の生涯における取り組みの全体像」とともに、彼女の「取り組んだ運動と女性福祉」という視点をもって分析していくということである。そして最後に「研究方法と論文の構成」として大きく「廃娼運動」「婦人参政権運動」「性教育・純潔教育」「売春防止」の4つをキーワードとして位置づけ、久布白の多岐にわたる諸活動を詳細に論究していくとされ、各章につき簡単に要約し、全体の論文構成が俯瞰できるように紹介されている。

第1章では久布白の生い立ちから1906年のアメリカ滞在時における日本人の売春女性や性教育との出会い、久布白直勝との結婚後、日本に帰国し、矯風会で活動を始める以前までを取り上げている。アメリカの地で売春する日本女性たちに対して抱いた「日本人として恥ずかしい」という意識が廃娼運動を始める原点となった。その後、公娼制度を必要とする社会と男性が問題であると考え、廃娼の必要性に目覚めていく。

第2章では久布白が1915年に矯風会機関誌『婦人新報』に廃娼論を投稿し、翌年の矯風会総幹事に就任後、廃娼運動の取り組み、初期の廃娼論を構成する視点を明らかにしている。男女貞操思想は男女の平等化を図ろうとしており、また廃娼を女性の人権から捉え、公娼制度は人身売買であるという問題意識も存在したが、

一方、売春女性たちを「醜業婦」「賤業婦」と呼ぶことは彼女たちの支援という観点に立ったものではなかった、と評価している。

第3章では廃娼運動における久布白の経済問題・労働問題の意識を取り上げている。活動の初期段階から問題意識は存在していたが、1928年のエルサレム会議の出席を機会にさらにその意識を高める。また、男女共同の廃娼運動の取り組みや仏教界との連帯等、矯風会内にとどまらない活動の広がりを見せていくことになる。

第4章では久布白と婦人参政権運動を取り上げている。久布白は廃娼や婦女の保護のために婦人参政権の必要性に目覚め、矯風会内にとどまらず、宗教や思想の異なる婦人運動家らと共同運動を実施した。つまりこの章では主に久布白の政治的な関わりを論じている。

第5章では関東大震災における久布白ら女性たちの救援活動を取り上げている。彼女は女性団体の団結のきっかけを作り、女性の視点を生かした活動を進めていった。こうした災害福祉に対して、久布白が関わっていったことは看過できない重要なものとして考察している。

第6章では戦前の久布白の性教育論を中心に取り上げている。彼女の主張した早期からの性教育、男子の性教育や生涯教育としての性教育の必要性は現代の性教育の課題でもある。久布白の性教育論は「純潔」と科学の二本柱であった。その「純潔」概念は禁欲という狭い意味ではなく、神の前に男女は平等であって、人間として互いに守らなければならないというものであった。

第7章では終戦直後の久布白の廃娼や婦人参政権要求のための働きかけから矯風会を離れて廃娼、女性の解放や人権確立のために政界入りを目指した時期、矯風会復帰後の勅令第九号法制化運動等について明らかにしている。選挙には落選したが、選挙活動の間、政治への知識を深め、その後『婦人と日本』の発行などに反映されていく。

第8章では久布白の戦後の性教育・純潔教育への関わりを分析し、その性教育論の戦前と戦後の連続性・非連続性について明らかにしている。戦後、科学的な性教育、純潔教育に加え、家族計画を導入し、久布白の性教育論は三本柱となった。現在の「純潔」を「民主純潔」と考えるなど、「純潔」に新しい意味を吹き込もうとしていた。

第9章では久布白の「混血児問題」の取り組みを取り上げている。彼女は「混血児」の数を正確に把握することで問題の実態をつかみ、政府や社会にあまり光を当てられていなかったひとり親が養育する「混血児」の支援を考えていった。それは「混血児」の母親の権利擁護やエンパワメントにもつながるものであった。また、「混血児問題」の取り組みを通して、性の問題に関する日本の戦争責任や平和への認識を深めていった。

第10章では久布白の売春防止法制定運動への関わりやその後の活動を明らかにしている。久布白は売春防止法制定促進委員会の委員長を務めるなど、運動の中心的存在であった。法制定後も売春対策国民協議会の会長を務め、法遵守や環境浄化のための様々な取り組みを行う。こうした久布白の努力にもかかわらず、法の制定とともに獲得した婦人保護事業によって救われた女性と救われなかった女性が存在したのも確かである。

最後の「むすびに代えて」では、論述してきた章を振り返り、まとめている。そして今後の取り組むべき課題についてもふれている。以上、本論文は「序章」に続き、1章から10章、「むすびに代えて」という構成からなっている。付録として「久布白落実略年譜」「久布白落実家系図」「純潔日本建設運動体系」「久布白落実著作・論文目録」が付されている。

## 論文審査結果の要旨

嶺山氏のこの論文の意図するところは、近代日本の廃娼運動史のみならず、キリスト教史、あるいは女性史、社会福祉史において重要な役割を果たした久布白落実の生涯の実像を究明していくことにある。それは取りも直さず久布白という人物の全体像の研究がなされていなかったことに依拠しているからである。そのために豊富な史料を駆使し、かつ実証的に論じ、近代日本における久布白像を確立することに成功している。以下、もう少し具体的に述べておこう。

第1に久布白落実についての研究は、嶺山氏も指摘しているように、これまで断片的に扱われてきた。したがってその全体像が見えてこないというきらいがあった。彼女には『廃娼ひとすじ』という自伝があるが、これは久布白の生前中の自伝的文章を高橋喜久江が没後にまとめたものである。したがって本人によって最終の校閲を受けたものでない。自伝は、彼女の歩みの大略を知ることにおいては便利ではあるが、自伝にありがちな記憶違いや思い違いもあり、さらに高橋氏の思い入れもあり、生涯をみていくとき、その検証が必要であることは言うまでもない。嶺山氏はその点、史料に忠実にあたり、実証的に論じている。

第2として、その実証性を裏付けるための史料蒐集において、出来る限りの雑誌や関係史料を漁り、久布白に関する論文や関係史料を渉猟していったことは、嶺山氏のこの論文にかける意欲が窺われるものである。巻末に付されてある久布白の著作・論文目録、とりわけ60頁に及ぶ論文目録の作成はそれを物語っていると言えよう。そしてそれを逐一読みこなし、論述しているところが評価できる。換言すれば、こうした史料蒐集への拘りなくして、この研究は不可能であったといつてよい。

第3として、久布白の生涯の事業と思想について、大きく廃娼運動、婦選運動、平和運動、性教育の課題、戦後の「混血児問題」、売春防止法に向けての活動を10章にわたって論述していることである。こうした多様な活動の一つ一つ丹念に論述していくことは大変な作業を伴うことは言うまでもない。さらにその叙述において、各章の問題意識を述べたうえで、さらにそれぞれにおいて研究史を整理し、当該の章において精緻な研究がなされていると評価できる。全体をとおして、明快な論理展開となっているのは、各論文の構想と論述方法とともに彼女自身の研究への視点が最後まで貫かれているからであろう。

第4として、久布白が日本キリスト教婦人矯風会という組織の中の人間であること、一方で個人の考え方との峻別をしながら論を進めていっていることにおいて、一定の配慮がなされている。これはこれまでの先行研究の批判にも通じることであるが、組織としての評価ではなく、久布白個人の思想をも考慮しながら考察をしている点において、久布白の人物研究として彼女に対する評価を引き出していることである。こうした視点があればこそ、従来の研究からさらに彼女を近代日本の社会運動家としての評価を高めているものと考えられる。自伝の表題『廃娼ひとすじ』というように、彼女の原点は常に売春という非人間的な状況へのプロテストであり、それは彼女の活動の屋台骨となっているものである。

次に嶺山氏の今後の研究課題をふくめて、研究の深化を期待し若干の課題を記しておきたい。

第1にこの研究は久布白落実という人物の研究であり、日本キリスト教婦人矯風会の研究ではないことはもちろんであるが、この組織と久布白個人関係も無視することは出来ないであろう。一般的な組織の評価だけでなく、さらに組織全体の歩みの理解を深化していくことも重要である。それは世界的な矯風会の歴史でもあった。その流れと日本の組織の流れ等、究明が必要である。その為には、久布白以外の矯風会の有力メンバーである、矢島楯子、湯浅初子、守屋東、林歌子といった人物との比較研究も必要であろう。そうすることによって、この研究は久布白研究とともに、矯風会研究にも大きな貢献となろう。

第2として、久布白研究にふれられていないところを埋めていく作業も必要である。例えば禁酒運動や世界的な矯風会活動についての言及である。また人物史研究であるとするなら、思想形成の時期がもう少し丁寧に研究されていけばと思われる。例えば、彼女の出自、そしてハワイやサンフランシスコ時代はもっと現

地調査を踏まえながら考察していくと、久布白の初期の状況が分かってくるであろう。

第3として史料に関して、さらなる渉猟の必要性があると思われる。例えば全体をとおして、書簡史料の利用が皆無である。書簡は彼女をめぐる人物関係を面白く映し出す鏡のようなものであり、また、ことの本質、久布白個人の正直な内面が吐露される場合も多々ある。今後の課題としていただきたい。

最後に、読みやすさとともに、史料によって位置づけていくという点に配慮が行き過ぎた結果からか、はたまた確立していない像へ力点が置かれ、事実への論究に追われたか、論述において遠慮がちの叙述もある。もちろんこれはことの本質を突き詰めての判断が必要かと思われるが、今後の氏の研究の深化を期待するものである。

以上、この論文は久布白落実という人物を日本キリスト教婦人矯風会との関係を中心にして、考察したものであり、問題の所在と先行研究の詳細なレビュー、渉猟した史料を駆使し実証的に久布白という人物を位置づけている。斯かる意味において、この研究は従来の久布白落実研究を飛躍的に高め、久布白の人物史研究のみならず、日本キリスト教婦人矯風会の歴史、女性史、さらに社会福祉の歴史研究において大きな貢献をしており、博士（人間福祉）の学位に相当する論文であると判断し、ここに報告するものである。